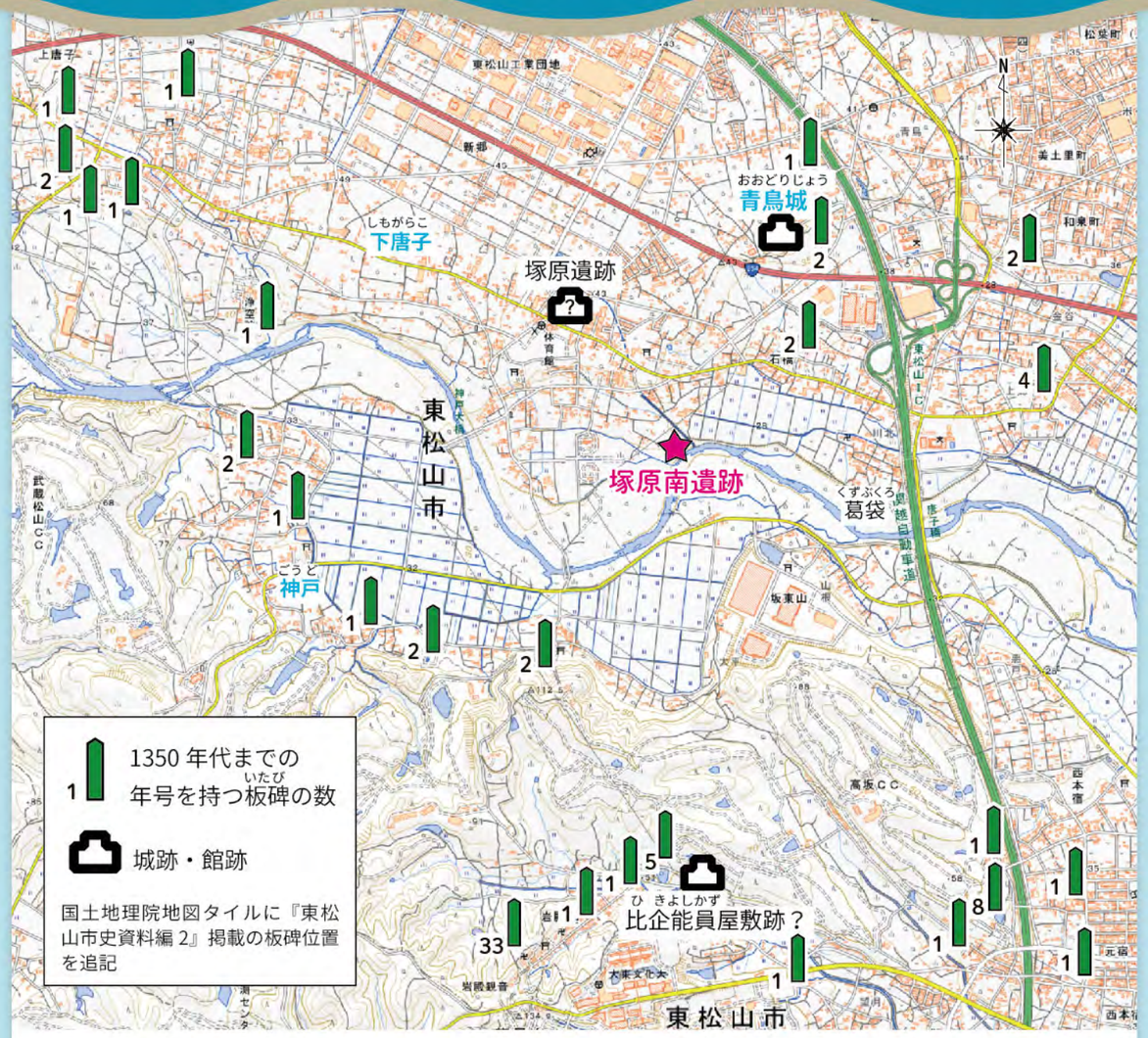
# 鎌倉時代後期の塚原南遺跡周辺






鎌倉時代の塚原南遺跡周辺は、どのような場所だったのでしょうか。

上の図は、周辺の中世遺跡と、14 世紀前半までの板碑の所在地を地図に示したものです。塚原南遺跡のある下唐子周辺では、遺跡も板碑もほとんど見つかっていません。神戸や青鳥城周辺から多く見つかっており、下唐子より先に集落が存在していたようです。

では下唐子周辺には何もなかったのでしょうか？調査成果からは逆の様相が読み取れます。塚原南遺跡には、大溝に囲まれた特別な建物があったと考えられないでしょうか。

大溝に囲われた未調査の北側にはいったい何があったのか。今後の調査の進展にご期待ください。

## 東松山市　塚原南遺跡（第２次）

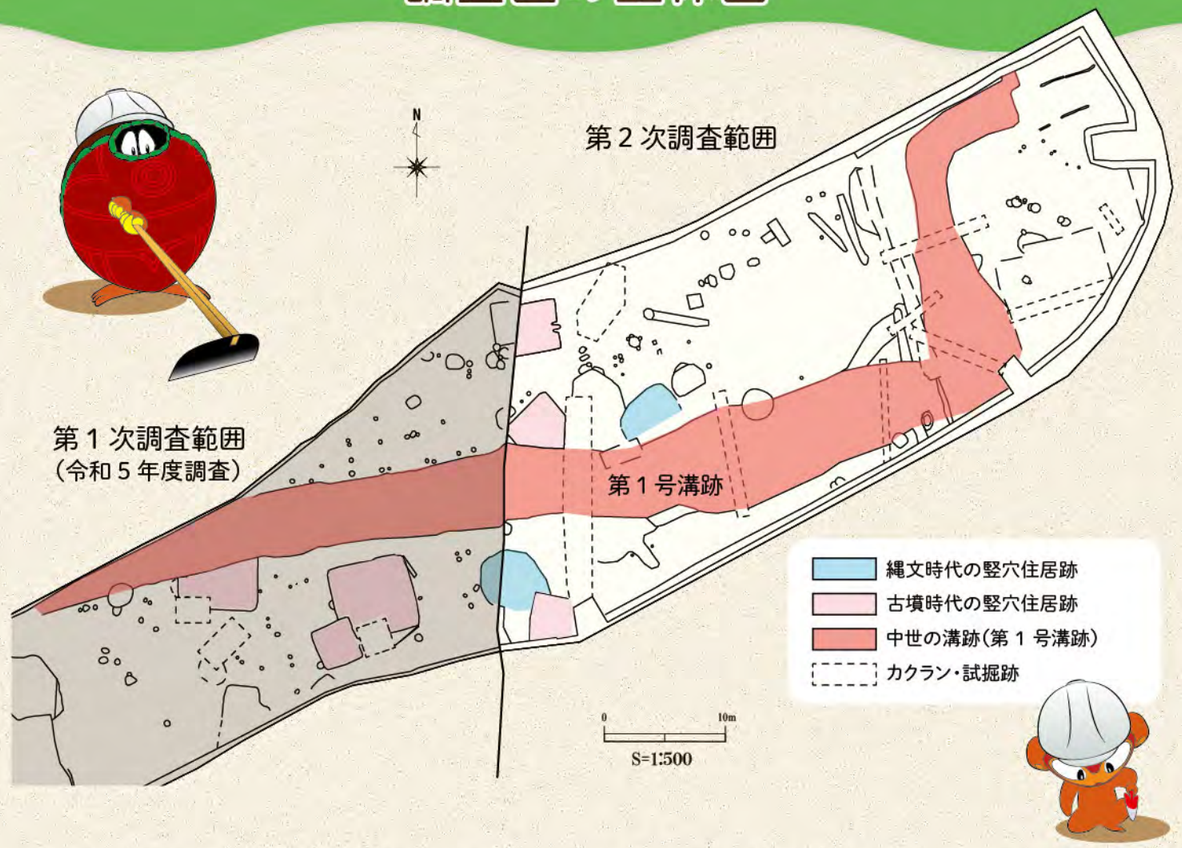
塚原南遺跡は、都幾川に沿って形成された段丘の上に営まれた遺跡です。令和５年度に第１次調査を、令和６年度に第２次調査を行っています。発掘調査では、縄文時代（約６,０００年前）から中世（約７００年前）まで、幅広い時代の遺構や遺物が見つかっています。

今回の見学会は、中世の溝跡に焦点をあてました。近年、鎌倉・室町時代は、にわかに脚光を浴びています。塚原南遺跡やその周辺ではいったい何が起こっていたのか探っていきます。

写真上の森を囲むように、Ｌ字形に溝がつくられています。
森の部分は、地元で昔「かわらけ山」と呼ばれていました。

主 催　埼玉県教育委員会　公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
共 催　国土交通省 関東地方整備局 荒川上流河川事務所　東松山市教育委員会

# 調査区の全体図




第２次調査では、竪穴住居跡５軒（縄文時代２軒、古墳時代３軒）、溝跡９条、そのほか土壙が数十基確認されています。

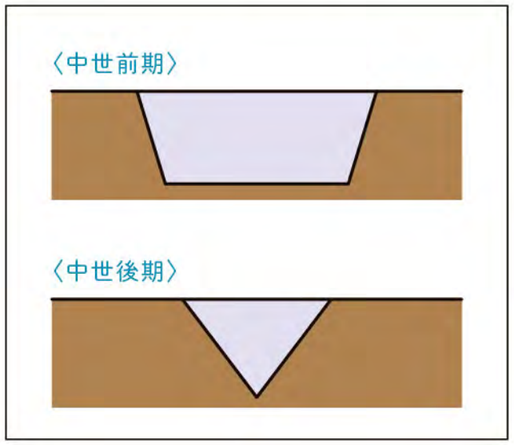
遺跡は都幾川を臨む段丘の先端部という好立地を背景に、縄文時代から集落が営まれてきました。やがて、中世になると大きな溝による区画が設けられます。この溝跡からは、鎌倉時代後期（14 世紀）より新しい遺物は出土せず、室町時代を迎える前には埋まってしまったことがうかがえます。

では、鎌倉時代後期に造られたと考えられるこの溝は、どのようなものだったのでしょうか。

## 中世の溝（堀）について

各地に設けられていた平安時代の貴族の所領は、次第に地元の「武士」へと実質的な経営が移っていきます。武士の時代の到来です。

武士たちの居館や集落は、周囲に土塁や堀という施設を設けて、防御的性格を強めていきます。堀は古いものは断面が逆台形ですが、新しい時代、特に戦国時代頃になると、上り下りが困難な V 字形になります。堀を造った際に出た土は外側や内側に盛り上げられて土塁が造られます。




# 大溝（第１号溝跡）

大溝は、最大幅 8.85m、最大の深さは 0.91m あります。長さは、昨年度見つかった溝跡とも合わせれば、100mを超えます。大溝は、調査区の台地部と低地部を画するように、調査区をＬ字形に横断していました。

溝跡の中に堆積した土を観察すると、礫を含む上層と、焼土を間に挟んで粘土のような下層に分けられます。当初の埋まり方と、焼土を挟んだあとの埋まり方が異なっているようです。

## 主な出土遺物

### 板碑

（参考：坂戸市 塚の越遺跡）

中世を通じて流行した供養塔です。13世紀頃のものと14 世紀頃のものが確認されています。

### 銅銭「治平元宝」

1064 ～1067 年に中国で製作された銅銭です。こうした銅銭は、日本に 12 世紀頃から大量に輸入され、広く流通していました。

（参考：蓮田市 新井堀の内遺跡）

### 常滑焼

（出典：『新版概説中世の土器・陶磁器』）

13世紀頃に、現在の愛知県常滑市あたりで焼かれた常滑焼の一部です。左下写真のような形になることが想定されます。

## 縄文時代から古墳時代の調査成果

調査区西側では、縄文時代から古墳時代まで幅広い時代の竪穴住居跡が発見されています。遺跡が立地するこの段丘は川に近く、縄文時代から人々の暮らしの舞台でした。

調査区全体に広がる大溝からは、これらの時代の遺物が多く出土しており、こうした古い時代の遺構を壊して造られたことがわかります。

古墳時代の住居跡